

# 會津能樂會會報

## 第10号

発行者  
会津能楽会  
責任者  
湯田眞佐弘  
〒969-5311  
南会津郡下郷町  
大字豊成字倉241

- ② ③ 特集 会津能楽会と
- ④ ⑤ 野出蕉雨
- ⑥ 根ざし行く育成委員会活動
- ⑦ コロナ禍のなかで育成部はどう活動したか
- ⑧ グループ紹介(第5回)
- ⑨ 「和楽会」設立趣意書を読む
- ⑩ 追悼
- ⑪ 能装束着付け部便り 会津能楽会の動向
- ⑫ 役員名簿  
その他情報  
編集後記



あいさつ

会長 湯田 眞佐弘

新型コロナウイルス感染症騒動は、諸方面において未曾有のこととして大変な混乱を引き起こしましたが、会津能楽会にとっても今までにない事態をもたらしました。

会津能楽会では、昭和二十七年以来、毎年、春の演能会、薪能、秋の演能会と三回能を演じてきましたが、この二年間は、その伝統を守ることができませんでした。

演目が決まり、立ち方が決まって稽古に入つた途端、新型コロナウイルス感染症の波が押し寄せ、稽古を中断しなければならぬ事態におちいるということがありました。稽古ができなくては本番を迎えることはできません。かくして、この2年間、会長として悔しい思いに身を焼かれるような気持ちで過ごしてきました。

各社中の普段の稽古も、同様ではなかったかと拝察いたします。

こうした未だ嘗てない状況のなかで、過日、NHKBSスペシャルで「必ず よみがえる魂のオーケストラ一年半の闘い」というド

キュメンタリーが放送されておりました。コロナ禍のなかで充分な練習ができない楽団員たちの焦燥と苦悩を描いた映像でした。そのなかでホルンの奏者が口にした呟きが印象的でした。「練習を一回休むと三日戻る。何よりもモチベーションが失われる。そのモチベーションをいかに持続するか、それが苦しい…」

会津能楽会は、長い歴史の中でこれまでも幾度か存亡の危機に瀕したことがありました。そのとき、先人たちは、その都度それを乗り越えてきました。その原動力となったのは、能楽に対する純粹な熱情です。

今、私たちが遭遇しているコロナ禍という災難は、私たちにとって試練です。その試練を乗り越えるためには、能楽への熱い想いを抱いて、弛むことなく、日々稽古に励むことしかないと考えます。外界の変動に煩わされることなく、地道に踏み出す一步一步の確かな歩みに信を置いてみなさんとともに進んで行きたいと思



今でも使われている野出蕉雨の筆になる鏡松の幕

# 特集 会津能楽会と野出蕉雨

この二年間、会津能楽会は、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、ほとんど事業を展開することができませんでした。春秋の演能会、薪能、それらに付随する申し合わせ：築十年を経過した能楽堂は、見所にニセアカシアの花が散るのにまかせて、二年の間さびしくたたずんでおりました。

隔年刊行の「会津能楽会会報」は毎号二年間に実施した演能を四ページに亘って記録・紹介してきましたが、それがありませんので、今号は初めて遭遇した世界的危機のなかで、今までの会津能楽会（界）を振り返り、これからのありかたを探る特集を組んでみました。

会津能楽史を繙いてみますと存亡の危機とみなされるときが何回かあったことに気づきます。幕藩体制が崩壊して武士階級が消滅したとき、武家の式楽・嗜みとされていた能も危機的状况にありました。また太平洋戦争が敗戦という形で終結したとき、連合国の占領軍が進駐して、新しい日本をつくるために、それまでの日本の伝統的な文化を否定しました。そのなかに「能」も含まれていました。

そうした苦境のなかで会津の先人たちは「能」を守ってきました。そのご苦労と努力に想いをいたすとき、一人の人物が浮かんできます。会津の武士でありながら、会津能楽会中興の祖と仰がれる「野出蕉雨」という人物です

平成八年会津能楽会編『会津の演能』「会津における能楽の歴史」（松枝和夫氏）を要約転載、会津能楽会（界）の歴史を振り返り、野出蕉雨の果たした役割をたどりまします。

## 会津における能楽の歴史

### 1 開花・前期

#### 蒲生時代までの期間

（一一八九—一六四三）

佐原氏から芦名氏へ統治者を替えながら会津は中世の時代へと移ります。この間、京都や奈良では神社や寺院で能の元祖ともいふべき「田楽」や「猿楽」が奉納・興行されておりましたが、会津では、この時代、神社や寺院が数多く建立されていたものの、「田楽」や「猿楽」が演じられることはありませんでした。

やがて、芦名氏は伊達政宗に滅ぼされ、会津は伊達氏の治世となりました。伊達政宗は、かねてより政略的手段として能に強い興味関心を持ち、自ら金春流の能を修め、会津に侵攻する前から大鼓・白極善兵衛、笛・平岩勘七などの囃子方を引き立てて庇護するなどしておりましたが、豊臣秀吉の奥羽仕置きによって、攻略した会津を剥奪され、一年で転封されたため、伊達政宗が会津で能の事績を残すには至りませんでした。

伊達氏移封の後、蒲生氏郷が代わって会津の領主となりました。氏郷は大関秀吉の信任が厚く、文祿二年（一五九三）の秀吉の主催した天覧能番組にその名をとどめる程の能の巧者でした。能好



また、藩校日新館には、享和年間（一八〇〇）ころ、雅楽舞台とともに能舞台も造られてありました。

会津の能は、保科時代に始まり、松平時代に至つて、武士階級から町方まで広まり、隆盛を極めました。

しかし、やがて、戊辰役を経て明治の世となり、武士階級が消滅したことによって能楽は後ろ盾を失い、衰滅の危機を迎えました。職分の能楽師は旧主徳川慶喜を頼つて静岡に赴くものや、地方へ移転するものもあり、江戸・新東京に能楽はその影を失いました。

明治五年、外務卿岩倉具視が欧州諸国を視察した折、それぞれの国においては、古来あつた伝統的な歌舞音曲の価値を大切に保存している実態を目の当たりにして、日本においても能楽保存の必要を認識して帰国します。明治九年四月四日、天皇、皇后、華族多数を自宅に招待して、天覧能を催行しました。こうした政府要人の、能の持つ価値を再認識するという姿勢が一般化され、能の復権をもたらしました。

### 3 復興期

戊辰戦役で敗れた会津は、戦後処理と復興のため疲弊しきつておりましたが、会津人の能への愛着と情熱は失われてはおりませんでした。明治十

一年、敗戦から十一年後、能を愛好する有志四十名によって「和楽講」が結成されました。その「和楽講規則」第一条に

「和楽講は、遊楽の雅会にして、金を積み財を蓄積するの講にあらず、尊卑貧富を論ぜず

乱舞（らつぶ）謡曲の同志を会し、平常勉強の鬱余を散慰するを以て本旨とす。

されば、常に礼讓穩和を以て交わり、仮令にも誹謗讒毀（ざんぎ）な不雅風の行、決して

あるべからず」

と結講の目的と精神をのべています。この四十一名の方々は、それぞれの資力に応じて総計一八四十銭（現在の千五百万円に相当）の資金を拠出。この資金を元に能装束、能面、諸道具を購入。人心荒廃が嘆かれる敗戦下、会津人士を能楽によってささえたのは、幕末から明治にかけて定住指導してきた職分の長名新蔵、桐谷鉞治郎、両師の尽力によるものでした。

明治十九年四月四日、山田楼において、小田磯之助、榊原光政の主催で、「桐谷先生会始」として演能会を開催。能「右近」「七騎落」「雲雀山」「熊坂」「望月」、狂言「いろは」「瓜盗人」「脱から」が演じられ、一二九名が参加して盛大な演能会となりました。

こうして会津の能楽界は次第に戊辰戦役から立ち直りを見せはじめたものの、戦中・戦後の混乱

から中央との交流が希薄になっていたため、芸の地方色が憂慮される事態も生じはじめておりました。こうした状況を憂えた野出蕉雨は、長名新蔵師とともに家元との繋がりを復活、会津の能楽を正調に戻すことに力を尽くしました。

こうしたひびとの熱意と尽力によって、大正期には「市内の芸妓連もこぞつて稽古に励んでいる」と新聞で紹介されたり、各地に謡の会が結成され、「謡初会」がいたるところで催されるなど、会津の能は隆盛の一途をたどりました。

### 4 その後

しかし、やがて戦時色が濃厚になるにつれて、芸事は顧みられなくなっていました。

そうした世相にあつても、地拍子の習得に努めたり、太平洋戦争末期には装束を疎開させて空襲から守ろうとしたりする人々がおりました。

太平洋戦争が終結して四年後、ひとびとが、まだ日々の生活に追われていた時、「会津宝生能楽会」が結成されました。さらに昭和九年には、「初心者向き謡講座」（後の「和楽会」）が結成され、会津の能楽の裾野が一層広がることになりました。

また、昭和三十四年には、会津の宝生流と観世流が合流して、「会津能楽会」が生まれました。これは、とかく排他的になりやすい能楽界にあつて、二つの流派が合流して活動するという、他に

見られない画期的なできごとでした。

こうしたひとびとの能楽への熱い想いは、平成二十年、会津に市民の力によって能楽堂を建設するという一大快挙となって結実しました。

維新によって朝敵とみなされ、とかく世の中の主流からはずされるという悲運のなかで、会津のひとびとは必死になって、みずからの立ち位置を求めて努力を重ねてきました。その忍苦が不撓の魂となって実を結んだことをここに実感します。

# 野出蕉雨

## 会津能楽中興の祖



野出蕉雨は、弘化四年（一八四七）父会津藩士野出八左衛門、母ナオの次男として生まれ、名を「平八」と称しました。幼少より絵画を好み、十

五歳のとき、会津塩田牛渚に描画を習い、後に蕉

雨と号しました。また、この頃、武芸をも学び、

特に槍術は大内流を上遠野保に師事し、十八歳の年に免許を取得。さらに、十九歳で大坪流馬術の免許を得るなど、多方面で才能を発揮しました。

慶応四年（一八六八）、鳥羽伏見戦争が始まると、二十二歳の蕉雨は軍事方御雇を命じられ、東方面に出かけ、国境絵図をつくったり、戊辰戦争では白河方面に出陣、危険な斥候を自ら進んで引き受けるなどの武勇譚を残しています。

明治二年（一八六九）、父亡き後の家督を弟八郎に譲り、大沼郡本郷の瀬戸村に移り、絵筆一本での生活を目論みますが、維新の混乱の世で、それは困難なことでした。止む無く、巡査となり、裁判所の書記雇になったりして糊口を凌がなければなりません。

世も次第に落ち着いてきたころ、本郷の地場産業陶業も復興の兆しが見え、海外へも輸出するようになり、増産を求められたことから、蕉雨は乞われて陶画の指導も手がけるようになりました。

明治一七年（一八八四）、会津戦争の際、共に戦った戦友松本良順の招きに応じて、画技研鑽のため三十八歳で上京。松本の世話で作品の頒布会を開催、第二回内国絵画共進会で入選するなど、中央画壇でも認められるようになりました。

明治二十一年（一八八八）、母の病状がおもわしくなく、看取るために東京を引き払って会津に

帰郷。その後は、会津を離れることはなく、母を見送ったのち、大正八年、七日町に居を移して、再婚の妻と二人、静かに余生を送り、昭和十七年（一九四二）六月二十四日、九十六年の生涯を閉じました。

この間、蕉雨は宝生流生田虎之助に師事し、会津能楽界の近代化に中心的な役割を果たしました。会津能楽会には、舞台鏡板を飾る幕の老松の絵、能面「弱法師」「童子」など、野出蕉雨の作品・寄贈品が多数残されています。



野出蕉雨の寄贈した能面「弱法師」

参考文献…『会津の演能』会津能楽会

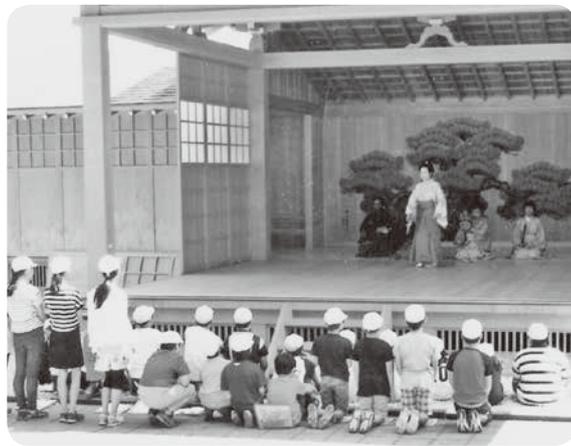
『会津人群像』第四号歴史春秋社

『蕉雨と文石展』実行委員会

# 根ざし行く育成委員会活動

## 能教室等の実施状況 令和二年度

月・日	学校等	学年・人数
9・9	松長小学校	六年生 25人
9・10	松長小学校	六年生 25人
9・15	荒館小学校	六年生 24人
10・4	ワークショップ	一般人 45人
10・13	謹教小学校	六年生 10人
10・20	鶴城小学校	六年生 45人
10・20	鶴城小学校	六年生 27人
11・4	永和小学校	六年生 26人
11・13	日新小学校	六年生 24人
11・17	河東学園小学校	六年生 58人
11・18	河東学園小学校	六年生 28人
11・19	東山小学校	六年生 28人
11・20	東山小学校	六年生 32人
11・27	神指小学校	六年生 17人



## 令和三年度

6・22	荒館小学校	六年生 34人
7・2	松長小学校	六年生 61人
7・14	城西小学校	六年生 97人
7・16	東山小学校	六年生 52人
9・8	神指小学校	六年生 13人
9・10	城南小学校	六年生 61人
9・11	ワークショップ	一般人 10人
9・14	永和小学校	六年生 16人
9・21	河東学園小学校	六年生 67人
10・12	謹教小学校	二年生 6人
10・19	鶴城小学校	六年生 48人
10・21	鶴城小学校	六年生 49人
11・2	小金井小学校	六年生 91人
11・5	門田小学校	六年生 110人
11・11	坂下東小学校	六年生 55人

## コロナ禍のなかで 育成委員会は どう活動したか

令和二年四月にはコロナ感染者が増大していたので、小学校での能教室は一学期には行わず、状況を見て二学期から実施することにした。また、実施に当たっては、一度に行う人数はできるだけ少なくすることにした。このため人数の多い学校は二回に分けて実施した。

実施に当たっては、実施予定校すべてに赴いて、校長と担任に会い、その学校で全校集会を行う場合や音楽等声を出す場合の指導状況を聞いて、能楽教室を行う場合の指針とした。

令和三年はコロナの状況を踏まえ一学期より実施することとした。

### 一 能楽堂での実施について

当局より能舞台には指導者を入れて原則十四人、研修室は九人以内で実施するよう指示された。このため各校とも一回三十人程度で実施し、前半は見所でディスタンスをとらせ、「能とは」「能の歴史」「能舞台について」説明し、さらに素謡「庭の砂金」仕舞「月宮殿」「太鼓あしらい」に合わせて笛「ハタラク」舞

囃子「羽衣」キリを見学させた。次に、面と楽器についてはそれらを見せながら説明するにとどめた(体験は省略した)。その後、見所から能楽堂に移動させた。能楽堂に入る際は舞台への人数を十四名程度になるよう一クラスを(一)班と(二)班に分け、

片方は鏡の間から、橋掛かり舞台と説明しながら移動させ、舞台では仕舞を体験させ、その後、研修室で謡を指導した。(二)班はまず謡を指導し、その後、(一)班同様、順次鏡の間から移動させ、舞台での仕舞体験が終了したら、玄関より見所に移動させた。能教室実施校は少なかったが、指導回数は多くなった。なお、コロナ対策として、児童が能楽堂に入るときと出るときは手を消毒させた。

### 二 体育館での実施について

実施は原則的に一クラスずつとし、この場合、学校での集会のときのように十分ディスタンスをとらせて説明、見学、体験をさせた。その結果、実施した学校は少ないが、指導回数は多くなった。また、令和三年度はコロナの感染者が減ってきたことや、学校からの要望もあり、小鼓、大鼓、太鼓の体験をさせた。なお、鼓の調べをつかませるための手袋や、手消毒用アルコールを準備し

ていた学校があった。面体験では手を消毒させマスクをしたまま顔を顔に当てさせた。しかし、笛の体験は中止した。

### 三 指導に当たる育成委員の コロナに対する対応

①体温が平常であること。②咳が出るなど異常がないこと。③マスク着用すること。④事前に手指消毒のこと。⑤指導時に児童間のディスタンスに留意すること。

### 四 令和三年度能楽教室等で 特筆すべきこと

(1)小学校二年生の能楽堂での能学習について

鶴城小学校の二年生七人と先生が街中探検を選んでやってきた。見所から能舞台を見学させた後、能楽堂に入れ、簡単に能やその歴史を話した後、「鶴亀」の地謡の一部を聞かせた。その後、児童には正座させ、鶴亀の始めのころの謡を教え、仕舞については扇を持たせ、運びを指導した。その後、面を見せ、笛を聞かせ、最後に舞囃子「羽衣キリ」の一部を見学させた。

後日、担任より全校で体験発表をするため、扇を借りたいとの連絡があり、五本貸与した。見学し、体験

したことを校内発表させるとのことであった。どのように発表するのか、発表前の練習状況を見学した。三人に謡わせ、四人には扇をかざして、すり足をさせ、大きく回った後、元の位置に来て、扇を右わきに収め下居させていた。始まる前と終わっての扇の扱いもしっかりできていた。地謡の児童は謡を暗記していても見ずに謡っていた。小学校低学年の能の指導は初めてであったが、低学年でも能の指導は可能であると思った。

(2)ワークショップについて

今年度は博物館で、「あはひのクニあやかしのクニ」の企画展を行うので、これにあわせて内容の能をワークショップで取り上げてほしいと博物館から要望があった。そこで、講座で「黒塚」をとりあげることにした。説明だけでは解りにくいと思いい、「黒塚」の能七十分を、能の成り立ちと老婆の変身の様がわかるように十二分間に編成して、パソコンとプロジェクターを使用して、これを説明しながら提示し見せた。感想文には「初めて能に触れて楽しかった」「能がよく理解できた」等が記されていた。この手法は能の理解には有用である。(平山)

# グループ紹介(第五回)

## みやび会

平山 昇

みやび会は水上輝和師によって創設された会です。師は能楽師とは縁もゆかりもない家に生まれ、どうしても能の道に進みたくて、いきなり家元の自宅に飛び込んで入門を申し込まれ、何度も断られたそうですが、宝生公恵先生のとりにして入門をゆるさされ、大学では佐野萌先生の指導を受けられました。



水上優師

佐野先生はいつみ会の会主で会津でも、何カ所かで教えておられ、時おり水上師に代稽古を指示されました。やがて、佐野先生がご多忙になり会津地方の「いづみ会」を水上師が「みやび会」として引き継がれました。引き継がれた同門会は、若松をはじめ坂下、宮下、山口、いわき、田島などで会員数はおよそ五十名でした。

水上師は毎年水道橋で大会を実施していましたが、どの会場も盛会で良い思い出となっています。

輝和師は残念ながら七十一歳で亡くなられましたが、追悼文で多くの会員が先生は誠実な方で誰にでも優しく、時には厳しく真剣に教えていただいたと記しています。その後、みやび会はご子息の優師が引き継がれ掬水会と共に指導なさっています。

優師は子供の頃から子方をされるなど経験豊富で、現在、東京芸大の講師や能楽会の理事をされています。

同門の稽古では謡の間の取り方など、時には厳しく張り盤をたたいて指導され、文脈に沿った謡い方なども丁寧に教えてくださいました。みやび会の会員は高齢となり会員数が減っていますが、会員一同先生のご指導に応えるよう、毎月自主的に集まり謡の稽古をするなど精一杯努力を重ねています。

## 芳馨会

会主 宝生流師範 佐藤ヨシカ

命名は宝生流能楽師故佐野萌先生です。先生のお好きな「芳」と私の名前、漢字「勝馨」の一字「馨」で「ほうきょうかい」、どうぞよろしくお願ひ致します。昭和五十四年、我が家に稽古場が出来、佐野先生御出席の上、稽古場抜きを致しました。この年以前に母の「寿宝会」や「会津女子高等学校能楽部」(現葵高)の指導をしておりました。田島、猪苗代、坂下の各地に十年程稽古をしていました。坂下の稽古は、現在も続いています。

この二年の間、コロナ禍で様々な

催し物や公の会場が使用できなかつたり致しましたが、芳馨会では数回お休みする位で、皆さんの稽古は続けました。稽古場での飲食を禁止、マスク着用等を守りながら、稽古は、謡、仕舞、太鼓等を指導していますが、会員の皆さんに育てられている私です。年二回の発表会、他に「和楽会」や「宝生連合会」へも参加しています。第四十三回秋の発表会は、令和四年九月第一土曜日を予定しております。十七歳の高校生から九十四歳の方まで三十余名の大所帯です。もう少し頑張つて続けていきたいと思ひます。

橋本五十雄氏による稽古場の鏡松



坂下金上公民館 鶴畔会 団体稽古

# 「和楽会」設立趣意書を読む

「会津における能の歴史」で概観しましたように、会津の能楽は幾度かの危機を乗り越えて今日の状態にたどり着きました。そして今、新たな危機に直面しています。コロナ禍のなかで十分な活動ができなかったことが會員の減少に繋がらないか危惧されます。

そこで、会津能楽会結成の基になった「和楽講」の趣意書を原文で紹介し、意識を付して、先人が会津の能楽に抱いた熱い想いに触れてみたいと思います。

諺に之あり、英勇は能く勉(つと)め能く楽しむ。夫れ人生酷苦勉勵、以て各その業に就き亦その労倦(ろうけん)の鬱を散慰(さんい)するに非(あら)ざれば、その精心を倦退(けんたい)せしめ、或は、健康衰弱を醸(かも)し、遂に素志を中産せしむるのみか、非常の患害を生ずるに到るも亦ある也。然らば、即ちその労鬱を散し、精神蒼快ならしむるの術如何(いかん)。

即ち、之れその常に酷苦暇勉(びんべん)する所の就業一時解転し、各自嗜好する所の情性に従い、衆と共和し楽しむより楽しきはなし。

この故に、今我輩嗜好する所の歌伎乱舞(かぎらっぶ)は、即ち我施他観(がしたかん)共に娯楽する所也。

依りて、同志の雅友と謀(はか)り、協議既に成り、其の能舞の粧束を購求す。

その資金に於いては、衆僚の貧富

らすこともまたある。それならば、その仕事から受ける抑圧を無くし、精神を爽快にさせるためにはどんな方法があるか。

つまるところ、その方法というのは、日常常に朝早くから夜遅くまでひどく苦勞しているところの仕事から一時、解き放たれ、おのおの自分の楽しみとするところの気持ちにまかせ、同好の士と心を一つにして楽しい時を共有することに越したことはない。

このような理由から、今、私たちは楽しみとするところの謡曲・能楽を演じ、ひとに観てもらい、演じる側の楽しみと見る側の楽しみが共にひとつになって互いの娯楽とするのである。

よって、ここに謡曲・能楽を愛好する友人と相談・協議をしその能舞の装束を購求することにした。

その資金は、集まった人士の貧富によって、最初は多少差をつけて出し合ったが、能楽を楽しむことに差はないので、ざっくりばらんに平均化する方法で、基本のところでは経済的な貧富の差、社会的な身分の差などの俗事を離れ、天地がひとつになるようにみんなとともに、生を楽しみ、さらに能楽研鑽の力を培い育てようとするものである。

よって、この集まった人士をまとめて「和楽講」と称する。

創設以来、講に入つてひとと睦まじく交際することの快さと楽しみを求めたいと願うひとびとは、その生活ぶりに応じ、多少資金を補助し、結講の趣旨をよく理解して交流し、交際を密接にしていたきたい。

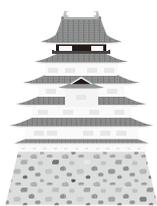
## 【釈】

この和楽講趣意書は、明治十一年に起草されたものとのことです。「会津における能の歴史」でも触れましたが、戊辰戦争が終わって十一年が経過したとはいえ、まだ会津は賊軍としてみなされ明治新政府の官界において中枢部に地位を占めることは困難な時代でした。こうした時代の空気のなかで、志を持つ有為な会津人士は悔しさをかみしめて耐えておりました。

その寂寥をささえたのは、義においてはずることなしという高邁な気概と誇りでした。そうした時代の空気のなかで切歯扼腕しながら耐え、嘗ての武士も町方も身分貧富の差を超えて能楽においてひとつになろうとする熱情が伝わってくる文面になっています。

コロナ禍によって分断を余儀なくされた私たちのすすむべき方向を探るためにこの

「和楽講」の趣意書を玩味してみたいかがでしょうか。



### 追悼

故松川善之助師



平成九年から七代目の能楽協会長を務められた、松晴会会主松川善之助さんが、令和二年十二月十日、亡くなられました。

松川さんは、若松の塗師の家に生まれ、亡くなられた父君善次さんの遺志を継いで、同じ漆器屋の山田由吉さんに師事して謡を始められました。戦後まもなく、宝生流能楽師佐野巖師に就いて教えを受けていた同業の蒔絵師五十嵐久雄さんから本格的な謡を習われました。その後、穴沢寿美（職分）さんに就いて、謡、仕舞、囃子を習得しました。

昭和五十年、小滝晴市さんと松晴会を結成し、たくさんのお弟子さんを育てられました。

晩年、娘さんに付き添われて、自由な身体を労わりながら演能会の楽屋を訪ねられ、出番を控えてそれぞれ緊張している演者たちを見て、「近頃、何を見ても涙が出んだよなあ」と愛しそうに笑まれたお姿が印象的でした。

長年、会津能楽堂建設協会理事として代表理事の満田政巨さんとともに能楽堂建設に尽力されました。会

津能楽会に貢献された松川善之助さんに哀悼の意を表したいと思いません。合掌

故中村 寿男師



平成九年松川善之助会長就任と同じく副会長（兼事務局長）となり、十三年

間、会長を補佐し会津能楽会の要として企画運営・技能向上に尽力されましたが、令和四年一月十一日、九十七歳でお亡くなりになりました。

松川さんは、晩年「中村さんなくして私の会長はなかった」と述懐なさっていました。これは中村さんに対する深い友情と感謝の意味と受け止める会員が大半でした。

奇しくも松川さんと同じ哀悼ページになったことはまことに感慨深いものがあります。

中村さんは自ら表に立つことなく大きな事業だった能楽堂建設運動を「行政頼み」から「募金活動」へと、舵を切るきっかけをつくりました。経済界の満田政巨さん（天宝会長）、能楽会の松川善之助さん（会長）のお二人を代表とする法人「会津能楽堂建設協会」が活動をはじめました。が、組織づくりでは中村さんのおかげのご尽力がありました。九年後に会津能楽堂は竣工しました。

「会津能楽囃子会」を発足させ会長として活躍されました。このほか長年にわたり地頭として活躍され、会津地域の能楽界をリードしていただいたことに感謝し哀悼の意を表したいと思います。合掌



### 「能楽堂建設寄付者御芳名」を堂内に掲額

能楽堂の建設主体は「会津能楽堂建設協会」という法人で、竣工後、法人は解散し、建物は会津若松市に寄付された。

完成の数年前に「個人情報保護法」が成立し、竣工と同時に寄付者一覧を掲額することはできなかつた。

しかし、募金活動の当初から、掲示する方針であったこともあり、金額表示は高額のみに限定して、金額で大きめに三分し、氏名の頭にS（一千万円以上）、A（百万円以上）、B（十万円以上）とした。それを、寄付者の住まい地域別、五十音別に掲示した。

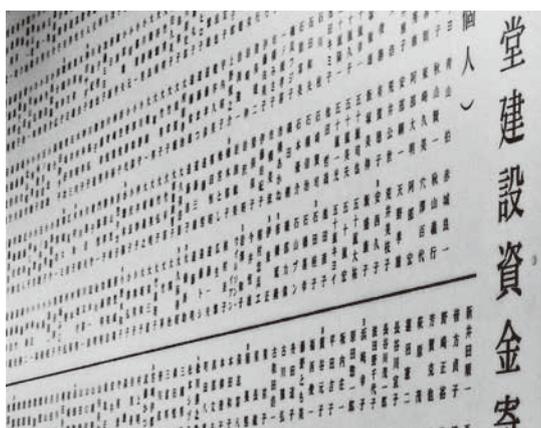
また、建設協会の役員として長年

にわたり活動された方、および、資本金出資者は太文字で表示した。末尾には建設運動以前に「能楽堂建設資金」を能楽会に託した方の氏名も追記した。

これらの掲示板設置の活動は建設協会の鈴木圭介氏による『会津能楽堂建設の記録』の出版、この本により掲示用実物大の原稿を作成・印刷（A3版用紙）された上野正義氏の活動が原動力となり、掲示板が完成した。

なお、市役所との折衝では、掲示板の作成は許可するが、工費は出せないとのことであったので、能楽会理事事に諮り特別会計からの支出となった。

工事担当者は（株）アド光芸東海堂、工事費は二十万円でした。



### 能装束着付け部便り

#### 「唐織」を新調しました



この程、本会会員の栗城幸子さまの御尽力により、神職を務められるご実家の栗城喜美枝さまから神前結婚式に使用された花嫁衣装の打掛が寄贈されました。金糸、銀糸、その他いろいろな色糸で織られた華やかな色合いで、これを能衣装に活用できなにかいろいろと相談した結果、唐織をつくっては、と話がまとまり、坂内庄一さんに仕立てをお願いしたところ、見事な唐織ができあがりました。花嫁衣裳特有の鶴の絵柄が大きくあしらわれているため、演目が限定されるのではないかと危惧され、職分の先生方のご意見をうか

がったりしましたが、それほど深く心配しなくても大丈夫とのこと助言をいただき、安心して製作にこぎつけました。生地が厚く、織目が込んでいたため針が何本も折れたりして縫子さんが苦労されたのでした。

唐織は、中国は唐の時代、蜀江で織られた織物で、それをまねて日本で生まれた織物の呼称とのことです。当時、中国の文物は、高級なものとして、時の為政者たちの憧れの的でした。

能装束の中でもっとも豪華で、主として女性の役の上着として用いられます。



#### 「鬘帯（かづらおび）」を

#### 寄贈していただきました

能衣装を着用し、面をつける前に鬘を押さえるように、鉢巻のように頭に巻き、後ろで結ぶ細い紐状の布——鬘帯（かづらおび）。この鬘帯の文様には、刺繍や金箔などの繊細な文様が施されております。

この程、日本刺繍絲花会の会長満田奈巳子さまと会員の笹川よし子さまから、鬘帯が寄贈されました。



左 笹川様 右 満田様

日本刺繍絲花会は、会津若松市内にある日本刺繍を愛好するひとたちが集う刺繍教室の会とのことです。



なお、「能楽用語辞典」によると

「若い女性の役には「色入／紅入（いろいり）」という紅色が使われたものを、中年以降の女性の役には「色無／紅無（いろなし）」という紅色が入らないものを用いる。植物の模様が表わされることが多いが、鬼女の役には三角形を連続させた「鱗模様」も用いられる。金銀箔を糊で貼りつけて模様を出す「摺箔」と、精緻な「日本刺繍」の技法が駆使され、

絹の生地全面に金箔を張り詰めた「胴箔地」という非常に豪華なものもある。」ということですが。

### 会津能楽会の動向

令和二年一月、中国武漢で新型コロナウイルス感染者が確認され、その後、世界中にコロナは広がり、今まで聞き慣れない用語が日常的に使われるようになりました。

コロナ禍、パンデミック（感染症の世界的大流行）、クラスター（感染集団）、ロックダウン（都市封鎖）、ソーシャルディスタンス（社会的距離）、濃厚接触、飛沫感染、三密、緊急事態宣言、まん延防止重点措置等々の言葉と飲食店に関してさまざまな規制がされて、懇親会もできなくなっていました。

発生から約二年は経過しても第六波が話題となり、収束が見込めない状況が続いています。これから始まる三回目のワクチン接種で収束すればと願うばかりです。

この二年間会津能楽会では関連する行事を含めてその活動や開催を中止せざるを得ない状況となりました。しかし、いろいろと検討をして会津能楽囃子会と会津の囃託会は中止することなくできたこと、また、小学校から能楽教室の以来があり、

応じることができ本当に良かったと思っています。

さらに、令和三年度は、四月に宝生流教授囑託会を三春で、十月には福島県宝生流連合会を「とうほうみんなの文化センター」で開催できました。

会が開催されれば、しつかりやりたいという気持ちは幾つになっても変わることなく、良い励みになると思います。令和四年はコロナ禍の終息を願いながら、前向きに検討をしてコロナ対策を実施のうえ、会を開催できるように進めたいと思います。

事務局 上野 正義

### 役員名簿

令和二年二月現在

会長	湯田 眞佐弘
副会長	折笠 成美
理事	平山 昇
”	上野 正義 (事務局長)
”	栗城 幸三 (庶務)
”	栗城 幸子 (会計)
”	坂内 庄一 (会計)
”	佐藤 ヨシカ
”	鈴木 圭介
”	一条 正夫
”	小野木 和子
”	角田 久美子
”	堀 篤子
”	佐藤 仁
”	渡部 妙子
”	河合 政弘

### 委員会構成 (代表者)

演能企画委員会	折笠 成美
財産管理委員会	一条 正夫
能装束着付部	堀 篤子
広報委員会	河合 政弘
ホームページ作成委員会	鈴木 圭介
会報作成委員会	佐藤 仁
育成委員会	平山 昇

令和三年二月現在

会長	湯田 眞佐弘
副会長	折笠 成美
理事	平山 昇
”	上野 正義 (事務局長)
”	栗城 幸三 (庶務)
”	栗城 幸子 (会計)
”	坂内 庄一 (会計)
”	佐藤 ヨシカ
”	一条 正夫
”	小野木 和子
”	角田 久美子
”	堀 篤子
”	佐藤 仁
”	河合 政弘
”	浜崎 幸子

### 委員会構成 (代表者)

演能企画委員会	折笠 成美
財産管理委員会	一条 正夫
能装束着付部	堀 篤子
広報委員会	河合 政弘
ホームページ作成委員会	鈴木 圭介
会報作成委員会	佐藤 仁
育成委員会	平山 昇

### 「その他」の情報

#### ▼能楽会員の状況

令和二年二月現在 六十八名  
令和四年一月現在 六十名

入会者 一名 佐原 昭一

退会者 八名

坂内 實 山内 幸雄

大久保善昭 中村 寿男

寺田林太郎 星 幹男

二瓶 晃 皆川 米作

物故者 一名 松川善之助

#### ▼受贈

令和二年

▽打ち掛け

寄贈者 栗城喜美枝様

(令和二年仕立て直し令和三年総会において唐織として披露)

令和三年

髪帯 日本刺繍 絲花の方々

▽シテ用髪帯 萩菊桔梗文様

寄贈者 満田奈巳子様

▽ツレ用髪帯 小花ちらし文様

寄贈者 笹川よし子様

### 編集後記

○令和二年、三年は新型コロナウイルス感染症蔓延のため、年三回実施してきた演能会が休会となりました。

○隔年に刊行してきた本会報は毎月、その演能会を中心にして、会津能楽会の二年分の事業や活動を報告し、記録してきましたが、本号は止

む無く「会津の能楽の歴史と野出蕉雨」という特集を組んで、会津の能楽を振り返り、それを通してこれからの会津能楽会の進むべき方向を探るといった試みをしました。

○これまでの会津能楽会(界)を振り返って思うことは、先人たちの能楽への熱い想いです。

○何度かの危機に直面して、その都度、乗り越えてきました。とりわけ幕末から明治への大きな変動を経て、大正・昭和へと会津の能楽を牽引して来た野出蕉雨の存在は特筆しておきたいと思いました。

○意図するところが充分にあらわせたか、甚だところもとない結果になりましたが、ご一読いただければ、編集者一同望外の喜びです。

○会員諸兄弟のご健康と御精進をお祈りします。

佐藤 仁 鈴木 圭介  
上野 正義 角田 幸子  
増井 典子 石田 桂子

